OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「共通教育を熱く語る!ー第1回学生・教員懇談会ー」の実施と分析 |
| Author(s) | 服部, 憲児; 山成, 数明 |
| Citation | 大阪大学大学教育実践センター紀要. 2009, 5, p. 41-47 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/5741 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第５号（2008），pp.41－47

【教育実践レポート】

# 「共通教育を熱く語る！－第１回学生・教員懇談会－」の実施と分析

服部　憲児・山成　数明

Implementation and Analysis of
"The 1st Student and Faculty Conference: Let's Debate on the Liberal Arts Courses!"

Kenji HATTORI and Kazuaki YAMANARI

The purpose of this document is to report on "The 1st Student and Faculty Conference" held in July 2008, and to analyze its results based on the inquiry survey conducted after the conference. This conference was conducted to debate on the following theme, "the ideal form of the Liberal Arts courses". By referring to the latest teaching methods as a guide, the students and the faculties debated on this topic, without having the differences in their status get in the way of holding a thorough debate. The reactions by the students were generally very positive. However, there are several issues that may need improvements on, such as the time management of the conference, and further enrichment of the debate topics.

## はじめに

大学教育実践センターは，平成20年７月30日にイ講堂にて「共通教育を熱く語る！－第１回　学生・教員懇談会－」を開催した。これは，合併後の新生大阪大学における最初の共通教育の実施を踏まえて，そのより良い在り方を学生と教員が対話をしながら，共に考えていくために企画されたものである。95名（学生57名，教員38名）の参加に加え，小泉潤二副学長，高杉英一副学長，大和谷厚学生生活委員会委員長も出席した。この問題に対する学生，教員，そして大学執行部の関心の高さを物語っているといえる。

学生と教員が交流する場としては，以前から「クラス代表懇談会」が実施されているが，時間や参加者が限られているため，十分な対話まで至らないのが現状である。その意味では，「学生・教員懇談会」は，学生と教員がじっくり語り合うことを主眼においた初めての企画であるといえる。ここには，教員が授業に対する学生の生の意見を聞くことができるという点で，FDとしての意義も見出される。したがって，「学生・教員懇談会」は実践分析の対象として大きな価値があり，この分析作業は，今後の大学教育の改善にも寄与すると考える。本稿は，この「学生・教員懇談会」について，開催に至るまでの経緯を整理し，実施した内容を紹介し，アンケート調査を中心にその成果の分析を試みるものである。

## １．「学生・教員懇談会」開催までの経緯

### (1) 開催のきっかけ

平成20年度は，大阪大学と大阪外国語大学が統合して新制「大阪大学」となって，初めての授業が行われた年である。そのため，統合により，共通教育にはどのようなメリットがあったのか，運営上のどのような課題があるのか等を把握しておくことが，今後の共通教育の実施においてきわめて重要になる。

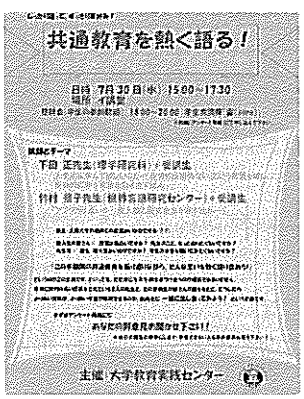
今年度前期に実際に授業を担当した教員の一部からは，学生については統合により相乗効果が見られる一方で[1]，教員についてはまだ十分に統合の効果が認識されていないという指摘がなされた。そこで，学生と教員が共通教育について，じっくりと本音で語り合い，相互に各人の意識を高めることにより，よりよい共通教育を構築することを目指して，本懇談会を開催することにした。６月中旬の話である。

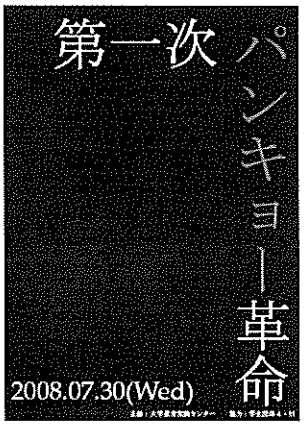
### (2) 開催に向けての準備

このように，急遽決まった企画であったので，準備期間が不足していたことは明らかであった。まずは講師とその内容を確定することを最優先とした。統合後の新制大阪大学の共通教育の在り方を問うという趣旨に照らして，実際に本年度共通教育を担当している旧大阪大学の教員と旧大阪外大の教員それぞれ１名に依頼するのが適当と判断し，下田正教授（理学研究科）と竹村景子准教授（世界言語研究センター）に依頼し，快諾を得た。また，学生・教員と教員が本音で語るという趣旨から，それぞれの受講生にも報告してもらうこととした。講師との打ち合わせも複数回行った。

これに一応の目処が立つと，今度は宣伝に取りかかった。ポスターの作成・掲示，ビラの配布，センター専任教員への授業でのアナウンスの依頼，E-mailでの呼びかけなどを行った。当初150人規模を想定してイ講堂を会場として確保していたが，反応はすこぶる悪かった。

この流れを変えたのが学生団体の協力であった。過去にこの団体のイベントの会場確保等を支援した経緯もあり，我々の協力要請を快諾してくれた。彼らがイベントの実施などで得たノウ・ハウを持っていたこともあるが，やはり若者の感性やアイディアには感服すべきところがある。第１にポスターをリニューアルしてもらった。教員・事務員作成のポスターもなかなか良いできだと思ったが，学生作成のものは視覚的に訴え，人目を惹くところがある。キャッチフレーズも刺激的である。第２に宣伝の方法として，教室の黒板を利用した。これは教員ではまず思いつかない。学生の日常生活から生まれた知恵とも言える。また，広報については，今後のことも考えて，当日参加者に対して何を見て参加したかを聞いておくことの提案を受け，参加者アンケート（後述）にその項目を入れることとした。




ポスター（左：教員・事務作成，右：学生作成）

第３に「マチカネワニ」（写真参照）の景品としての利用である。マチカネワニはセンターのキャラクターであり，縫いぐるみやエコバックなどのキャラクター・グッズもある。特に縫いぐるみは学生の間で人気が高いという。欲しがっている学生も多いが非売品である。この非売品という希少価値に目を付け，「参加者の中から抽選で当たる！」と宣伝することで，参加者を促進しようというアイディアである。民間企業人であれば思いついたかもしれないが，大学人ではなかなか出てこない発想である。「景品に釣られて参加するような学生はいかがなものか」という意見もあるかもしれないが，それが共通教育について真面目に考えるきっかけになって，その後の学業に好影響をもたらすのであれば，個人的には結構なことだと考える。

## ２．「学生・教員懇談会」の実施内容

### (1) 当初計画

「学生・教員懇談会」は教員２名および受講生の報告を中心に，参加者もできるだけ多く語ってもらうことを目指した。とはいえ，通常のシンポジウム形式では発言できる人数は限られている。そのため，フロアからの質疑応答は最低限に抑え，代わりにグループワークを取り入れることで，参加者全員が「語る」ことを計画した。

計画したプログラムは以下の通りである（具体的な計画の詳細については文末の「進行表」を参照）。

①報告
- ○下田正・受講生４名「大学生に学んで欲しいこと－『自分には関係ない』という意識を壊し，能動的に学ぶ意欲を引き出す試み－」
- ○竹村景子・受講生５名「アフリカは遠いか－先入観と固定観念を壊す試み－」

②事前アンケート調査の紹介・フロアからの意見聴取
③グループワーク：共通教育の改革提言
④ゲスト（小泉副学長・高杉副学長・大和谷学生生活委員会委員長）による改革提言へのコメント

上記のうち，③のグループワークについて，若干の説明をしておきたい。まず，会場設定をグループワークを行うことを念頭において行った。すなわち，テーブルで島を作り，それを囲む形で座ってもらった（写真参照）。報告の後に円滑にグループワークに取りかかれるようにするためである。グループワークの目標は，学生と教員がともに語り合うことにより，共通教育の改善案を作り上げることであることから，教員だけのテーブル，学生だけのテーブルが無いように注意した。

グループワーク自体は２段階で設計した。前半は個人作業で，報告（①）や意見（②）を踏まえて個人としての共通教育の改善提言を配布した用紙に書いてもらうことにした。この段階では，このテーマについて自分の考えを整理してもらうことを意図している。

後半は集団討論であり，同じテーブルのメンバーで個人作業の結果を見せ合うことから始め，お互いに意見交換しながら，グループとしての改善案を１つにまとめて提案することを計画した。これは，様々な意見がある中から，一方ではお互いに刺激し合ってアイディアを高め合っていくこと，他方では話し合いによって１つの意見にまとめ上げていく作業を求めており，コミュニケーション能力を培うことにも繋がる作業であると考える。また，今回の企画においては，学生と教員とが共同で改善案を考えることが重要なポイントである。

まとめられたグループの改善提案は，全体から見えるように用意したプレート（画用紙）に大きく書いてもらうこととした。それをもとに各班代表者が議論結果の簡単な報告を行い，ゲストにコメントをいただくこととした。

語り尽くせなかった部分は懇親会で継続する流れを想定し，プレートを懇親会場に持込んで，それを見ながら語ることにより，議論がいっそう活発になると考えた。

### (2) 当日の実施内容

以上のように計画した「学生・教員懇談会」ではあったが，実際には予定通りに実行できなかった。

まず，２件の報告であるが，予定時間をオーバーする熱のこもったものとなった。特に受講生報告者の「熱い思い」は予想を大きく上回っていた。共通教育を真剣に考えている学生がいることが分かったのは大きな収穫であったが，事前の打ち合わせをもっと丁寧にする必要があった点は反省材料である。

次に，業務の関係で予定を変更し，ゲストのコメントを先にいただくことになった。今回の企画にたいへん高く評価していただいたようで，やはり予定時間をオーバーして「熱い思い」を語られた。企画者としてたいへん光栄なことであるが，時間の管理という点では今後の課題の１つとなる。

以上の結果から，急遽後半の時間配分を変更せざるを得なくなった。事前アンケート調査の紹介・フロアからの意見聴取は取りやめることとし，非常に短い時間ではあるが，許される最大限の時間，共通教育の改革提言というテーマで，グループで自由に話し合うこととした。本当に不十分な時間しか充てることができなかったが，どのグループも一応の改革提言をプレートに書き，フロア全体に向けて報告した[2)]。

この不十分なグループ討議については，当初の予定通り懇親会で続きを行うこととした。懇親会の司会が，持ち込んだプレートを上手く活用しながら会場全体で話を盛り上げた。懇親会まで含めてトータルで見れば，一応何とか予定していた「熱く語る」ことはできたのではないかと考える。

## 3．「学生・教員懇談会」の評価

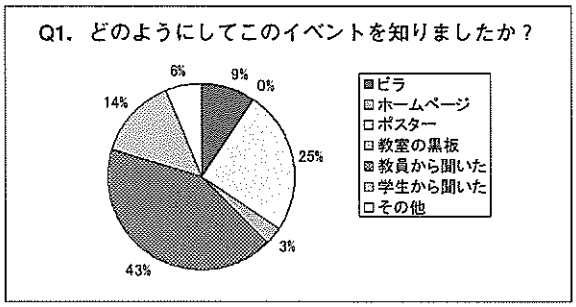
### (1) アンケート調査の結果

「学生・教員懇談会」は今回が初めての試みであったので，多くの部分が手探り状態で進められた。そのため，今後の活動の参考とするために，簡単なものではあるが，実施時にアンケート調査を行った。以下，その結果を分析することとする。

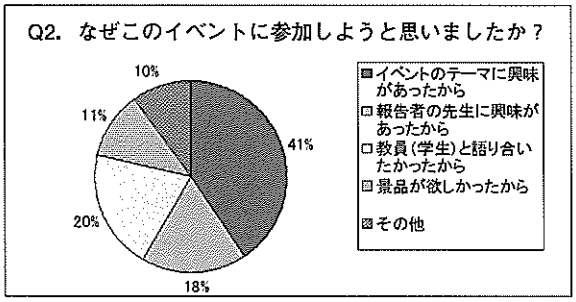
①この企画への参加について

まず，どのようにしてこのイベントを知ったかについては，最も多かったのは「教員から聞いた」（43%），次いで「ポスター」（25%），「学生から聞いた」（14%）となっている。教員に授業での宣伝を依頼したことが効果

があったようであるが，他の情報源で知った学生も少なからずおり，多様な手段での広報が必要であるように思われる。

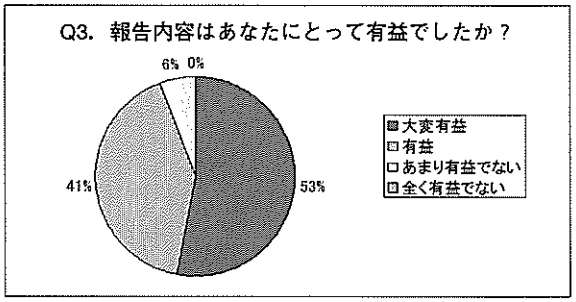


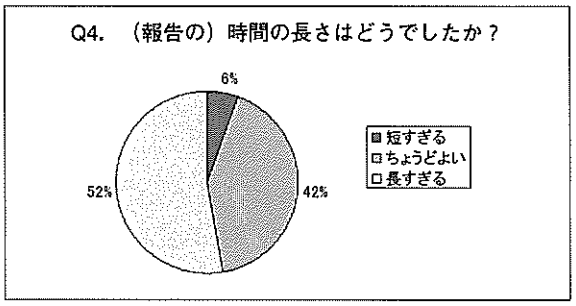

参加の理由としては，「イベントのテーマに興味があった」（41%）が最も多く，ついで「教員と語り合いたかった」（20%），「報告者の先生に興味があった」（18%）となっており，企画の趣旨に則った理由が多数を占めた。「景品が欲しかった」は11%で相対的に少数ではあったが，学生の興味を惹くのに一定の効果はあったと見ることができる。




②報告について

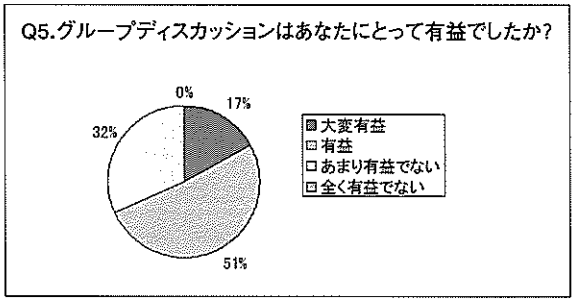
次に，報告内容が「有益」であったかを尋ねた。最初に作成した時は「満足」の語を用いていたが，「学生・教員懇談会」においては，参加学生を顧客ではなく，主体的な議論の構成員とみなしているので，「満足」したかどうかよりも「有益」であったかどうかが重要であると判断し，改めた。「たいへん有益」（53%）と「有益」（41%）を合わせると9割を越えており，きわめて適切な報告がなされたと言える。ただし，時間については過半数が「長すぎる」と回答している。報告時間が予定をオーバーしたことが影響しているのかもしれない。時間の管理と適切な報告件数・時間の設定を検討することが課題としてあげられる。

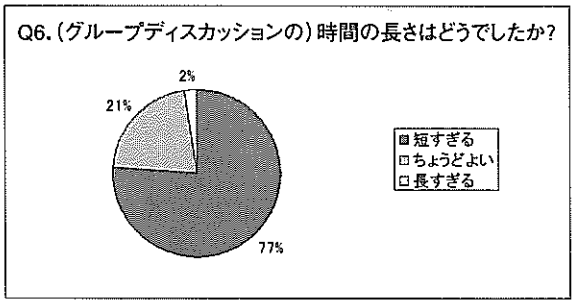



③グループディスカッションについて

まったく当初の予定通りに行われないばかりか，ごく短時間（約15分）ほどしか確保できず，せき立てるように「とにかく語った」ような形になったので，かなり厳しい評価であろうと予想された。しかしながら「全く有益でない」と回答した者はおらず，「あまり有益でない」とした者も3分の1程度で，約3分の2が「たいへん有益」または「有益」と回答している。時間については，予想通り「短すぎる」としたものが4分の3を占めた。

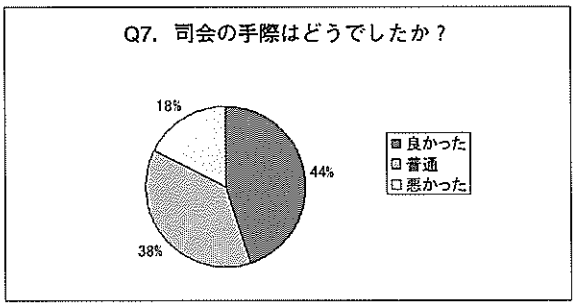



ここから，短い時間でも学生と教員で語ったことは意義があったこと，学生は教員との対話を切望していたこ

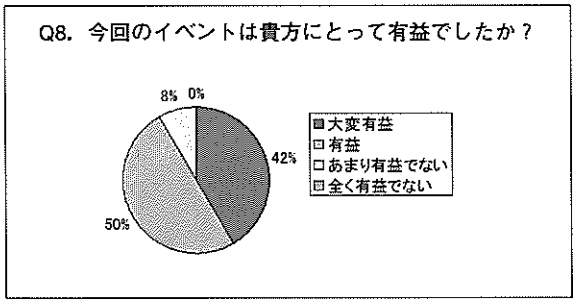
とが分かる。適切な対話の時間を取ることができれば，いっそう肯定感が高まり，充実したコミュニケーションが図れるのではないかと予想される。

司会の手際については，時間の管理に失敗したにもかかわらず，否定的な評価（「悪かった」）は２割弱にとどまっていた。「熱い思い」に負けたことに同情されたのかもしれない[3]。



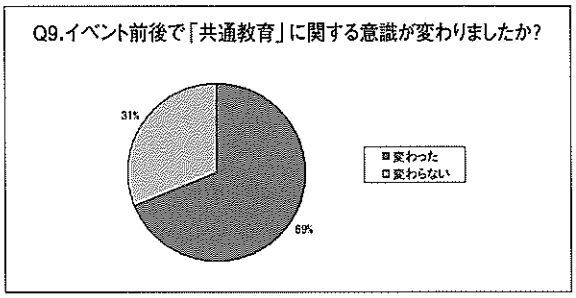

④「学生・教員懇談会」全体について

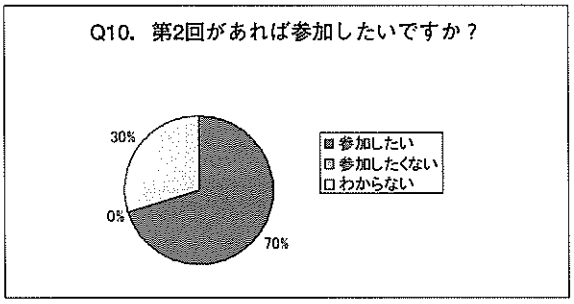
総合的評価とも言える「イベントはあなたにとって有益でしたか」の問いについては９割以上が肯定的な回答であった（「たいへん有益」42%，「有益」50%）。主催者側としては一安心である。




「イベント前後で『共通教育』に関する意識が変わりましたか」については約７割が「変わった」と回答している。このアンケートから，どのように変わったかまでは知ることはできないが[4]，９割以上が「たいへん有益」または「有益」と回答していることを考え合わせると，好ましい方向に変化しているものと思われる。そうであるとすれば，「学生・教員懇談会」を企画したことは成功であったとみなすことができよう。ただし，逆を言えば，３割の参加者は共通教育に対する考え方が「変わらない」としているので，第２回に向けて改善の余地は少なくない。

「第２回があれば参加したいですか」の問いには７割が「参加したい」と答えている。「参加したくない」と回答した者はいなかった。この企画が概ね好意的に受け取られたことを示すものと理解したい。本稿執筆時点で，第２回を企画中であるが，「わからない」と回答した３割の者が参加するような魅力的なものとしたい。




### (2) 自由記述欄における意見

次に，アンケート調査の自由記述欄に書かれた意見をいくつか紹介しておきたい。ここでは，技術的な事柄への言及ではなく，内容に関するものを取り上げる。

第１に，考えることの重要性について，以下のような記述がみられた。

> 「Critical thinkingが欠けているという部分もあるように思えた。…〈中略〉…他人，教授が言うことに対して，批判的視点が欠けている，と言えるのではないか。真っ向から反対する必要はないが，納得する前に考慮を加えることは必要だと思うのだ」
>
> 「これからは知的好奇心を動かして再スタートしたいと思います。単位のためではなくて自分が何を学びたいかを重要視するのが，当たり前だけど認識し続けなければならないことだと思いました。」

一方は批判精神に関すること，他方は主体性に関することである。いずれも大学生に有しておいて欲しい事柄である。「学生・教員懇談会」を通して意識付けができたのであれば，好影響を与えることができたと言えよう。

第２に，以下のように共通教育の拡充の期待に関する記述が見られた。

「一般教養を１回生までで終わらせないで欲しい，という意見があったが，私もそれに賛成だ。教養を身につける期限があるのはおかしいし，…〈学年が〉…進むにつれて自分の専攻のみに没頭し，閉鎖的になっていかざるを得ないシステムは，学生のためにならないと思う。」

「共通教育の幅広い発展をめざして努力してゆきたいものです。専門につながる基礎科目もほしいと思います。」

「高度教養教育が開講されることを期待しています」

共通教育（教養教育）に対する理解の促進，意識の喚起は本企画の目標の１つであり，主催者の意図が少なくとも一定程度は伝わったと解したい。

第３に，その一方で内容に対する不満も表明されている。

「期待してたような本音はあまり聞けなかった気がします。」

「この程度で“革命”と呼んでしまうことが，少し怖いです。」

「革命という名を語るのであればこんなプログラムじゃだめ。」

具体的にどこに問題があり，不満に感じたのかまでは，これらの記述から窺い知ることはできないが，いずれも「羊頭狗肉」だという指摘であると解される。いっそうの中身の充実を図るとともに，不満や否定的な意見を深く聞き出すシステムを構築する必要がある。

## まとめにかえて

最後に，「学生・教員懇談会」をめぐる課題と今後の展望を示して本稿を終えたい。

まず課題を示しておこう。第１に学生の行動実態の把握である。今回は７月30日に実施することとしたが，その理由は「29日まで試験期間なので，それが終わってからの方が学生は参加しやすいだろう」というものであった。ところが，参加申込者がなかなか増えないので，学生に聞いてみると「試験期間が終わると大学に来なくなりますよ」との答えが返ってきた。これをきっかけに参加者募集に力を入れたので，結果的には冒頭で示した参加者数となった。しかしながら，今回は学生の行動パターンを把握できていなかった点は反省材料であり，今後この種の会合を開く際に留意しなければならない。

第２に，技術的な問題であるが，会の円滑な進行があげられる。本文中でも示したが，「熱い」思いのコントロールができず，その点が参加者の不満の少なからぬ部分を占めていた。今回の反省を踏まえて適切な時間管理に努めたい。

第３の課題は内容に関わる問題である。参加した教員から，「良い授業を紹介することで，かえって学生の自発性を損なることにならないか」との意見が後日寄せられた。学生の「無い物ねだり」を助長することに繋がりはしないかという懸念である。この指摘は重大である。主催者側としては，学生に対して，単に人から与えてもらうのではなく，自分のこととして考えさせるような内容を追究していかなければならないと考える。

このような課題はあるものの，少なからぬ成果もあっ

**第１回　学生・教員懇談会　進行表**

| | | |
|---|---|---|
| 前日まで | 備品準備 | |
| | 会場確認 | |
| | 報告者打ち合わせ | |
| | 教員への参加呼びかけ | |

（敬称略）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 14:30 | 受付 | 研究部事務 | ※当日参加者の把握 | ネームプレート |
| 15:00 | 開会 | 服部 | | マイク×２<br>ＰＣ<br>プロジェクター／ケーブル／延長コード<br>ＤＶＤ／CD<br>スピーカー |
| | 趣旨説明 | 山成 | | |
| | 挨拶 | 工藤 | | |
| 15:05 | 報告（１） | 下田＋受講生 | | |
| 15:45 | 報告（２） | 竹村＋受講生 | | |
| 16:25 | 休憩 | | ※学生・教員が固まっているテーブルの調整 | |
| 16:30 | アンケート結果紹介<br>フロアの意見聴取 | 服部・フロア | ○半期の授業を受けて感じたこと<br>○報告を聞いて感じたこと等　　※２～３名程度 | パワーポイント |
| 16:35 | ワーク（１：個人作業） | 服部・参加者 | ○報告・意見を踏まえての改善提言を、配布した用紙に書いてもらう。 | Ａ４用紙×参加者数／ｽﾄｯﾌﾟｳｵｯﾁ／ﾍﾞﾙ |
| 16:40 | ワーク（２：集団討論） | 服部・ファシリテーター<br>参加者 | ○同じテーブルのメンバーで個人作業を見せ合う。<br>○グループで改善案を１つだけ提案する。<br>※学生と教員が共同で改善案を考えることがポイント<br>⇒改善提案をプレート（画用紙）に書く。 | 記録用紙・画用紙・マジック×グループ数<br>※前向きな視点での議論を要請<br>※報告者・ゲストも参加可<br>※プレートには大きな文字で書く。 |
| 17:10 | 各班発表 | 各班代表 | ○議論結果の簡単な報告（１分／班） | |
| 17:15 | 提案へのコメント | ゲスト（小泉・高杉・大和谷） | ○プレート<br>○ゲストに提案に対するコメントをいただく。 | |
| 17:25 | 閉会挨拶 | 学生代表／副学長 | | |
| 17:30 | 抽選会 | 服部・報告者・ゲスト | | ワニ（景品）／抽選用ボックス |
| 17:35 | 閉会 | 服部 | ○取り上げられなかった提案へのフォロー<br>○懇親会・第２回への誘い | 机と椅子の整理を参加者に協力依頼 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 18:00 | 懇親会 | 坂東 | ○各班の提案プレートを持っていく。<br>⇒プレートを見ながら話の続きをしてもらう。 | マイク<br>プレートを置く場所 |

たと考えている。すなわち，我々の意図したことは相当程度学生に伝わったのではないかと思う。それはアンケート調査に記述された以下の記述に象徴されている。

> 「共通教育は単位のために，やらなければならないもの，といふうに感じていた。むしろ，今回の懇談会に参加してはじめて共通教育の意義というものを考えた。」

「学生・教員懇談会」は，教員の側から見れば，授業から少し距離を置いて，学生の率直な意見を聞くことができる貴重な機会である。そこで肌で感じた学生の現状は，今後の教育活動にも活かされるであろうし，意識改革にも繋がると思われる。この意味ではFDとしての効果も有している。その意味では，今回38名もの教員が参加したことは大きな意義があったといえよう。今後，学生だけでなく，教員に対しても啓発の場としてさらに内容を高める努力をしていきたいと思う。

**註**

1）例えば，外国語学部生達にとっては旧外大では受講できない幅広い共通教育が受けられること，外国語学部以外の学生達にとっては目的意識の高い外国語学部生の姿勢が大きな刺激になっていることなどがある。

2）提示された提言は以下の通りである。「きっかけはバンキョー」，「意見交換を促進する」，「学びの自由」，「先生を育て，単位にしばられない自分を広げる教養！」，「学生の意見を聴く！」，「教員も改まる」，「全体を概観する授業」，「インタラクティブな授業を」，「責任意識を持てる選択システムを」，「意見交換しやすい環境」，「長期的に教養を受けることを可能に！」，「大学を五年制に」。

3）自由記述欄においても「ディスカッションの時間がもっと多く欲しかった」，「司会がもっと強引に時間管理をすべきである」といった趣旨の意見が多数寄せられた。今後の重要課題の１つである。

4）この点に関して，アンケート項目の改善が必要と思われる。

（はっとり　けんじ　　大学教育実践センター
教員研修支援部門・准教授）
（やまなり　かずあき　大学教育実践センター
教員研修支援部門・教授）